

稲垣良典著『トマス・アクィナス倫理学の研究』

九州大学出版会, 1997 年, vi + 416 + xi 頁

宮内久光

本書は著者のトマス・アクィナスの倫理学に関する永年の研究成果の中、比較的新しい 16 篇の論文から成る論文集であるが、全体は緊密に構成され、トマスの倫理思想の基本的構造を明確にするための十分な配慮がなされていることは注目に値する。本書がトマスの倫理学の全体像を解明しようとする本邦初の試みであることに心からの敬意を表したい。

全体は序論、人格と徳、自然法の問題、道徳と宗教、の四部に区分され、それぞれに数篇の論文が配置されている。第一部序論は「トマス倫理学の基本的性格」が提示され、アリストテリズムとの関わりが論じられる。まず第一章で倫理学はトマスにおいて「神のかたどり *imago Dei* たる人間」の考察であると規定される。倫理学によって考察される人間は、自らが造り出したのではない必然的な秩序、自然本性的秩序の観照と、理性がその考察の動きを通じて意志の動きのうちに自らに固有な秩序を造り出していくこと（徳の形成）の両方にかかわるが、トマスにおいてはこの必然的秩序は神的な創造秩序であり、またアリストテレスにおける人間に固有な秩序としての徳の考察の地平は「市民的生活」であったのに対してトマスは徳を「神にたいする人間の従属」に即して考察する点で両者には大きな違いが認められることが指摘される。次に倫理学が考察する対象、人間的行為、および内的・外的諸根源（徳、法によって導き、恩寵によって扶助する神）の考察がそこから出発すべき第一の根源が究極目的にはかならない限り、トマス倫理学が目的論的性格を備えていることは否定できないが、他方実践理性はその第一原理、自然法の掟を根源的に当為命題として把握する限りトマス倫理学は義務論的であり、実践理性の第一原理の目的論的側面があきらかにされるのは、その義務論的性格の根拠へのふりかえりを通じてであることが指摘される。究極目的である善そのものはそれ自体のゆえに友愛によって愛されねばならない

限り、トマス倫理学は幸福論的目的論ではなく、義務論の立場の貫徹であるとされる。この難問は第十二章でより精細に論じられる。

第二章では共に倫理的考察を究極目的ないし至福の考察をもって始めながら、再び至福の考察に立ち帰ることによって或る完結性を示すアリストテレスとの対比において、トマスにおける倫理的考察の根源的な未完結性、人間的行為とそれがめざす究極目的との間の何らかの断絶が示される。人間にとっての完全な至福「神的本質の直視」に対する受容能力は自然本性的能力によって獲得できないゆえにこの生において至福に到達することはない。では倫理的行為は至福とどのように結びつくのか。倫理的実践の最高の完成である愛は、至福そのものである神が自らの至福をわれわれに分ち与え、われわれがそれに参与することが許されることにもとづいて成立するのであり、その意味で至福が倫理的実践の基礎なのである。

「トマスにおける救いと至福」と題された第三章において、人間はいかにして至福に到達するかという至福論の議論とキリストの托身および受難を通して恩寵によって与えられる救いに関する議論の一体化にトマスの特色が求められる。救済論が至福論を前提とするということは、恩寵の業である救いを歴史的現実として考察するに先立って救わらるべき人間の自然本性を普遍的必然的側面において理解しようとする試みが為されることに他ならない。アリストテレスにおける至福が自然本性的能力を通じて到達しうるものであるのに対して完全な至福としての神的本質の直視は自然本性的能力を超えた恩寵の秩序に属するのであるが、至福の自然本性的側面は完全な至福に対する受容可能性としてあらたに位置づけられることになる。このようにしてアリストテレスとの連続性が回復される。「人間の救いは全面的に神の働きであり、恩寵の業であると同時に、人間が完全な自由の行使をもって成就する自然本性の完成である。」このことは測り難い神秘であるが、「この神秘はキリストが真の神であり、真の人間である、というより大いなる神秘の反映にはかならない。」以上の考察は倫理神学と哲学的倫理学との関わりに光を与えるものである。

第二部「人格と徳」は徳の概念の吟味に始まる。人間的努力を通じて獲得される習慣としての倫理的卓越性と恩寵の無償の賜物として人間に注入される信仰が、意味に大きな差異があるにせよ共に徳と呼ばれることに問題はないのか。習慣としての徳の形成は同時に自然本性の完成であるが、そのことは人間が自らを完全に神に対して開くことを意味する。この開きはそれ自体恩寵によるものといえるが、その開きが人間

の自由意志によるものであることを否定するのではないゆえに、習慣の概念と神的賜物の概念は相互に他を排除するものではないことが示される。(第四章)

以上のことを前提した上で信仰、希望、愛の対神徳が第五章で扱われる。まず信仰概念の解明が創造論に基づいて試みられる。それは、罪人を義とする信仰は愛によって完成された徳としての信仰であるという主張の理解にかかっている。人間の自然本性は神的創造の業であるが、徳の形成はその神的創造の業に参加することに他ならず、人間が自らに固有な自由の因果性を極限にまで能動的に行使することが神的創造の業と結びつくのである。

この世界の更新を通じて実現される神の国への希望を特徴とする「希望の神学」との対比において、トマス神学における希望は個人的性格を有するのであって、希望するもの自身の善、救いに関わるのであり、意志の働きとして愛と見られる限りの希望は不完全なものである。希望において愛されているのは善そのものであるよりは、善を分有し享受する自己であるからである。しかし神的善そのもののゆえに愛することと分有されている限りでの神的善を愛することとの間に矛盾があるわけではない。

トマスは愛徳が根本的に人間の魂に注入された恩寵であることを肯定しつつも、愛徳はすべての徳の形相であって、それが徳である限り人間の究極的な自己実現としての至福への道であると考えた。完全な愛は自己超越的な友愛であり、この友愛は神の側における降下によって成立する。また愛徳が友愛である限り愛徳の社会性が肯定される。神的善は無限に分有可能なすべてのものの共通善に他ならないからである。しかし、それによってわれわれが神と一致する内的な愛が愛の外的な業よりも優れていることはいうまでもない。

第六章「恩寵と自由意志」において、恩寵についてのトマス固有の見解を初期の著作から神学大全への探究の歩みを通して明らかにする試みがなされる。人間が自由意志によって恩寵へと自らを準備することは可能か、という問題に関して、トマスの恩寵理解が恩寵の本質を魂のうちなる習慣的賜物として探究するにとどまらず、原因としての恩寵、魂を内的に動かす神の恩寵扶助において探究する方向に深められたことが最終的に次の引用によって示される。「人がそれによって恩寵の賜物を受けるための準備を為すところの、自由意志の善い運動そのものも、神によって動かされた自由意志の働きなのである。」

倫理的考察の主題である *imago Dei* がもろもろの行為の主人である人間、ベルソ

ナであり、トマス倫理学の全体がペルソナの解明を主題とするという認識に立って、第七章では voluntarium の概念をてがかりに意志の根源的な働きを行使する人間としてのペルソナの自然本性が考察される。人間の意志は、自然本性的な傾向性としての根源的な働きにおいて「動かされるもの」であって、その原因である「動かすもの」としての神が探究の射程のうちに入らざるをえないことが指摘される。第八章では形而上学的分析を通して理性的能力が自由の根據であり、人間をペルソナたらしめるものであることを論証するが、人間の理性的本性は神の創造因果性に対して直接に開かれたものとして根元的に未完結であり、理性的本性にもとづいて成立している人格は、神的創造の業に参与するものとして自らの自然本性を実現完成すべき課題を担うことになる。

以上の第二部までの拙い要約からトマスの倫理的考察の全体像がおぼろげながら浮かび上がってくるように思われる。著者の意図は神学大全第二部のテキストに即してトマスの倫理的考察を正確に理解することにあつた。imago Dei として人間の倫理的考察は帰するところ恩寵と自然本性を相互の緊張関係として把握することに他ならない。トマスは恩寵がすべてであることを主張したけれども自然（本性）を廃棄することにはなかつた。自然本性としての意志は本来究極目的としての至福に秩序づけられており、徳の形成の運動全体を成立させるのも同じ自然本性的な目的欲求であって、至福である善そのものをそのものゆえに愛する運動は自己超越的であって超自然に向って開かれるのであり、自由の根源として人間を人格たらしめる理性を完成するのは理性をより完全に真理に従属させることである限り人格は自然でありながら超自然への受容可能性をもつのである。このようにして自然（本性）の活動はその極みにおいて神的創造の業への参与を通じて恩寵に結ばれ統合されることが可能になるといえよう。トマスが構想した「自らが神の像たることを自覚する人間が遂行する徹底的自己省察としての倫理学」が本書において見事に展開されていると考えられる。この倫理学が「聖なる教え」の全体構想においてどのように位置づけられるかという著者の課題の実現に大いに期待したい。

第三部は著者の積年の自然法研究の成果が展開されているだけでなく、第二部までの全体的構造の理解を深めるより詳細な理論的解明がなされていて教えられるところが多かつた。第四部「道徳と宗教」は「神に崇敬を捧げる」ことに関わる religio が、トマスにおいて正義の徳に属する倫理的徳の一つであることの考察を通じてトマス倫

理学の特質を明らかにする試みであるが、指摘されるように宗教の問題性に光をあてるものであると考えられる。